

第一部門 〈哲学・思想に関する論文〉 奨励賞論文

加賀の千代と「名月」の句

― 「朝鮮通信使献上句控」を読む ―

酒 師 みどり

# さか し 酒 師 みどり さん

## [略 歴]

年 齢 64歳

住 所 白山市

略 歴 茨城県出身

茨城大学教育学部卒業。同県にて高校講師、中学校教諭を勤めた後、白山市に転居。2005年から4年間、金沢大学市民大学院で学ぶ。

著 書 『月も見て 千代の句と出会う旅』

(2010年 北國新聞社)

## [応募動機及びコメント]

加賀の千代については 近年ごく一部の研究者を除いて殆ど取り上げられることはなく、その評価も未だ虚実入り乱れた伝説の中に埋没した観があることを、日頃とても残念に思っていた。

「朝鮮通信使献上句」は、千代が61歳の時に藩命により献上した小句叢であるが、そこには、自身の感性への矜持と共に、藩政期を生きた女性としての濃やかな心遣いと、円熟した俳人らしい鮮やかなバランス感覚による構成の妙が窺え、創意と配慮に満ちた豊かな世界が広がっている。

殊に、「名月」の句を中心とした数句には、晩年の二十数年を貫く核としての千代の仏教的世界観が現れていることに、私自身感銘を受け、一つの論文としてまとめる中で、応募を思い立った。

今回、当地・同郷の仏教者、暁烏敏の名を冠した奨励賞をいただくことに縁の不思議を思い、深く感謝すると共に、今後も加賀の千代の真価を探り続けていきたいと決意を新たにしている。

論文概要

加賀の千代と名月の句

—「朝鮮通信使献上句控」を読む—

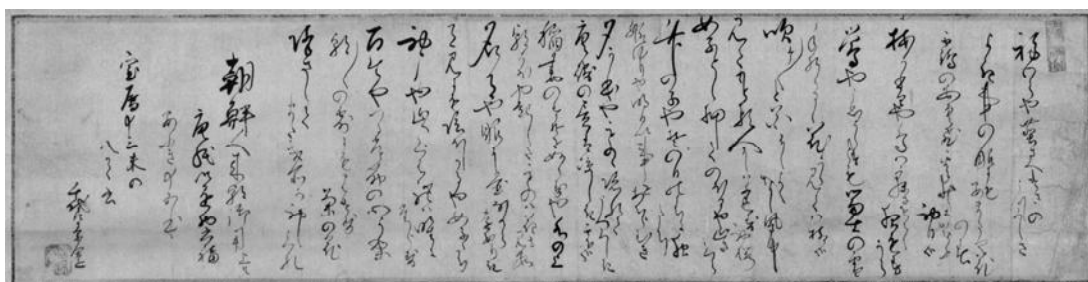
宝暦一三年（1763）、加賀の千代が藩命により献上した「朝鮮通信使献上句」は、日韓外交への貢献や、日本の俳句が初めて海外に渡った点など、これまで主に対外的な価値が語られてきたが、その内容については殆ど考察されてこなかった。しかし、その「控え」を虚心に読む時、それは単なる「覚え書き」ではない、創意と配慮に満ちた充実した世界であり、小さな句集の観を呈していることがわかる。

「献上句」は、千代がそれまでの生涯を俯瞰して吟味した句を多く含むとともに、全体の流れや一つ一つの句の密度なども繊細に練られ配置された、一つの作品世界である。中でも特に「名月」の句を中心として千代自身を表現する三つの句には、六十一歳という老熟した時期の千代の内にあった仏教的世界観・価値観が鮮明に現れている。

本稿では、先ず、「献上句」二十一句を丁寧に読むことを目ざし、そのひとまとまりの作品として見事な終始や、鮮やかなバランス感覚を明らかにする、と同時に、そこに自ずから見えてくる晩年の千代を貫く象徴的な「月」の意味を読み解いていく。

資料

朝鮮通信使献上句控



(番号は稿者による)

- ① 福わらや塵さへけさのうつくしき
- ② よき事の眼にもあまるや花の春
- ③ 鶴のあそひ雲居にかなふ初日哉
- ④ 梅か香や鳥は寝させて夜もすから
- ⑤ 鶯やこゑからすとも富士の雪
- ⑥ 手折らるゝ花から見れば柳哉
- ⑦ 吹け／＼と花によくなし鳳巾
- ⑧ 見てもとる人には逢はず初桜
- ⑨ 女子とし押すのほるや山さくら
- ⑩ 竹の子やその日のうちに独たち
- ⑪ 姫ゆりや明るい事をあちらむき
- ⑫ 夕かほやものゝ隠れてうつくしき
- ⑬ 唐崎の昼は涼しき雫哉
- ⑭ 稲妻のすそをぬらすや水の上
- ⑮ 朝かほや起したものは花も見す
- ⑯ 名月や眼に置ながら遠ありき
- ⑰ 月見にも陰ほしかるや女子たち
- ⑱ 初雁や山へくはれは野にたらず
- ⑲ 百生やつるひと筋の心より
- ⑳ 朝の露にもはけす菊の花
- ㉑ 降さしてまた幾所か初しくれ

朝鮮人來朝御用上ル

唐紙御懸物六幅

あふぎ十五本

宝暦十三末の八月書

千代尼素園 印

『千代女生誕三百年祭』

特別展「千代女の生涯」

「千代女の芸術・心」

より

はじめに(「朝鮮通信使献上句控」を、以下「献上句」と略す)

宝暦一三年(1763)、加賀の千代(以下、千代と略す)は、加賀藩の命により「朝鮮通信使御用」のための扇子十五本と掛け物六本、計二十一点を献上した。それぞれに千代の一句ずつを記したもので、その時の二十一句の「控え」を浄書したものが現在に残っている。(P 19資料参照)

朝鮮使節団は幕府・第十代徳川家治の將軍就任の慶賀のため来朝したもので、加賀藩はこの年迎接の任に当っており、恒例の使節団への土産物に供するため当時女流俳人として知られていた千代に、句軸等の献上を命じたのである。

千代はこの時六十一歳になっていた。十七歳で蕉門の各務支考に見出されて以来、寡作の時期も含めて四十年余の精進を重ねてきた千代は、五十二歳で剃髪して素園と号し、還暦直前には浄土真宗の祖親鸞の五百回忌法要のため遠く京にまで参詣に出向くなど、七十三年の生涯において、既に十分に老熟した時期に入っていたと見られる。

献上の品は一点に一句ずつのばらばらな作品であったが、「控え」の二十一句を通して読むと、それは単に千代の好みの句、或いは代表句というようなものの列挙ではなく、始まりと終わりのある一つの流れと、全体を貫く視点があり、僅か二十一句ではあっても、創意と配慮をもって編集された、小さな「句集」の観を呈していることが分かる。

同じ頃になった『千代尼句集』刊行の勧めには、当初固辞したと伝わる千代だが(注一)、藩命とあっては躊躇の余地はなく、正面から四十年余に亘る自らの句作に向き合ったに違いない。そして選句を進める中で、それが一つの句叢として需められたものではなくても、誠意をもって取り組むほどに自ずから一編の句集のように、季節を配分し、献上という

特殊性において終始を吟味し、自らの俳歴に照らして句を選び、全体としても納得のいくものにならないではいられなかったものと思われる。それは現実には、ひとまとまりの作品として扱われることはなく「控え」の役割に終始したが、実は密かに、千代の内なる世界の本質を鮮明に映しだしている。

千代の「献上句」は、日本の俳句が海外に渡った最初のものであり、また、日韓関係に貢献した点など、主に対外的な価値が語られてきたが、その内容についての考察は殆どなされてこなかった。

本稿では、これまで触れられなかった、献上句のひとつとまりの作品としての側面に光を当て、藩政期を俳人として生きた千代の六十一歳という充実した時期に内にあったものを紐とく。

注一 千代の生前に刊行された『千代尼句集』・『俳諧松の声』の二句集は、千代自身の発意ではなく、企図・編集とも長年の俳諧の仲間である無外庵既白によるものである。

### 「献上句」の概観

一読して最初に気付くのが、句は春夏秋冬、つまり季節の順に並んでいることである。句選に際して先ず四季を念頭に置くことは、当時の俳人として自然であろう。句数で見ると、「春」↓九句、「夏」↓四句、「秋」↓七句、「冬」↓一句、の割合となる。

更に見ていくと、一つの季節の中でも、より濃やかに推移が詠み込まれていることがわかる。「春」の九句は、最初の三句が「初春||新年」で、残りの六句は、「早春」の【梅】・【鶯】から【初桜】、そして「晩春」の【山桜】へと、ゆるやかに季節の景を辿っている。

同様に、秋は、「初秋」の【稲妻】・【朝顔】、そして「中秋」の【明月】・

【月見】、更に「晩秋」の【初雁】・【百生】・【菊】へと、これも、しだいに冬に近づいて行く。

そして最後は、【初しぐれ】で初冬の景であり、四季を完結しているが、本格的な「冬」の句は無い。また、四季の流れの中にありつつ、「夏」の句など一部には視点の異なる小さなまとまりがあり、また対になる句も幾つかあつて、流れにリズムを生み出している。

【二】は季語について初回、又は季語として扱う時のみに表示する。また、原典には送り仮名や濁点は殆どないが、本文中では適宜補うこととする。

#### ・最初の三句

- ① 福わらや塵さへけさのうつくしき
- ② よき事の眼にもあまるや花の春
- ③ 鶴のあそび雲居にかなふ初日かな

献上句の最初の三句は季語で言えば【新年】又は【初春】にあたり、新しい年の始まりと共に、季節の始まりの時期である。この三句には、季語【福わら】・花の春（＝新年の美称）・【初日】などと共に、「うつくしき」・「よき事」・「鶴の遊び」など、麗句が連ねられている。また、「福わら」の「福」、「眼にもあまる」の「あまる」などにある豊かさ、「かなふ」にある明るさ、「雲居」という上級の世界への含意など、あふれるほどの善美に満ちている。古い言葉で言えばこれは、「ことほぎ」＝言祝ぎ、寿ぎに当たるだろう。心を尽くし言葉を尽くして新しい年を迎える喜びと、祝意を表現している。

さて、冒頭「福わら」の句である。歳時記には、「福わら」とは「正月三が日とか五日、家々の門口や庭に藁を敷いて穢れを祓い、福を招こう

とする民間の習俗」とあるが、ごく簡単に高い所へ掛けたりもしたようである。脱穀したあとの何の加工も施さない藁そのものを、新年を迎える簡素な印としたもので、次の例句にその情景が窺える。

藍糸を干し福藁をしたたらす 野崎ゆり香『新日本大歳時記』  
福藁を踏み訪ふ縁浅からぬ 本橋 仁 ( )  
福藁を銜(くわ)へとり合ひ神の鶏 前橋節子 ( )

よく乾いた藁は独特のよい香りがして褐色の色合いも明るく、温もりと清潔感を感じさせるが、当然ながら「藁」とは素材そのものであり、正月の飾り、或いは清めとして、門松や注連縄などとは比べるべくもない、質朴・簡素な、農耕民族の原初に還るような趣のものである。

しかしこの句では、この初句「福わら」の素朴で原初的な力強さが、「塵」という言葉の持つ本来の雑味をさえ、「塵さへうつくし」という格別な強調へと変え、全体の調子を高く保ち、新年の朝の空気の清々しいめでたさ、祝福の気そのものへと繋げていく。これは、千代の感性の力である。

実は、この「福わら」は、新年の象徴であると同時に、献上句全体のシンボルであり、ここにあふれる清浄の気は、献上句の幕開けを清める役目も果たしているといえる。

その清められた場に、②では「よきことの眼にもあまる」つまり豊饒の願いを重ね、③では日本の伝統的な新年の図柄である鶴を配し、「雲井」と表現された「高き」に居る人々（この場合は句を献上する先にいる人々）への敬意・恭順の意を重ねていると考えられる。

その意味で、新年の三句の中で柱となるのはこの「福わら」の句である。簡素極まる「福わら」を冒頭に掲げる堂々とした姿勢には、俳人としての千代の自らの感性への矜持と心意気が表れているといえる。また、

二十一句中「新年」の句が三句を占めるといふのは、割合として多いと思われるが、それは、この三句が「新年」を祝うと同時に、「献上句」の初めの挨拶を兼ねているからであり、この特殊性が、質量共に冒頭の篤さに現れたものと見ることが出来る。

現代では想像しにくいのが、江戸時代中期という封建制を生きた千代にとって、このような心情と配慮は、心からの、自然なものであったと思われる。

・早春 ④ 梅か香や鳥は寝させて夜もすがら

⑤ 鶯やこゑからすとも富士の雪

「新年」に続く「早春」の二句は【梅】と【鶯】を題材とし、「新年」の三句の、やや儀礼的に傾いた詠みぶりとバランスをとるように日常の調子に戻り、④「鳥は寝させて」、⑤（鶯が）「声枯らすとも」など、擬人法による、少しひねった表現になっている。

梅に鶯、雪の富士に鶯という、典型的とも言える句ではあるが、異国に向けての日本の情景の紹介の意味もあったかもしれない。しかし、このような表現も千代の一手法であり、時代の嗜好に適った表現方法であったと思われる。

・中々晩春 ⑥ 手折らるゝ花から見ては柳哉

⑦ 吹けくゝと花によくなし鳳巾

⑧ 見てもどる人には逢ず初桜

⑨ 女子とし押てのぼるや山さくら

(女子とし||女子同士)

「春」の後半は【花】||桜を題材とするが、それぞれにはっきりと視

点が異なる。

⑥は「手折らるゝ花」と比べれば、誰も気にかけない気楽な【柳】に視点を置き、花の賑わいをよそに独り気ままに揺れている様を詠む。

⑦で「吹けくゝ」と風を追いかけて走り回り、花には全く「よく」||欲のないのは風上げに興ずる子ども達である。この二句は、桜を背景に花とは無縁の「柳」や「子供たち」を描き、それぞれの楽しみに余念のない姿に、反って花の頃ののどかさを表現している。

⑧「見てもどる人」とは【初桜】を見に行つて帰る人のことであり、そのような人に「逢(は)ず」と言っているのは、自分も「初桜」を見に出かけてきた千代自身である。毎年見に行くあの森陰の桜が咲いたかどうか、と見に出かけて来たが、道々、自分より先に見て来たらしい人には遭わない。つまり自分が最初にこの桜を見るのだ、とひとり満足している。

⑨「押てのぼる」とは、互いに背中を押し合ったりして賑やかに坂道を登っていく「女子とし」つまり若い女性たちの姿で、彼女達も【山さくら】を見に行くのである。

⑧と⑨は、千代と若い女性たち、我と彼、個と集、一對の「桜」の句である。

千代の桜の句は初桜・山桜・葉桜まで含めて全部で八十七句数えられており、自身が最も多く詠み、好んだ題材と言える。ことに「初桜」を目にする喜びは、次の句のように、いつも格別なものがあった。

けふまでの日はけふ捨てはつ桜  
たからとは今日の命ぞ初さくら

『松の声』  
句録

しかし献上句では、このような自身の感慨は採らず、柳や子供、花見

の人など、花を廻る市井の景を一幅の絵のように描き、その中にさり気なく千代自身の姿を入れている。

・夏の句

- ⑩ 竹の子やその日のうちに独たち  
⑪ 姫ゆりや明るい事をあちらむき  
⑫ 夕かほやものゝ隠れてうつくしき  
⑬ 唐崎の昼は涼しき雫哉

献上句における「夏」の句はわずか四句であるが、先の「春」―【桜】の四句に劣らず多彩である。

⑩ 「その日のうちに独り立ち」する【竹の子】は、夏の朝もやの中に土を割って尖った茶色の頭を出す。物みな旺盛な生命力にあふれる初夏の象徴のような浚刺とした姿である。

⑪ 【姫ゆり】とは小型の百合の種類であるが、この句の印象は少女のようである。「明るい事」とは、何かいい話であろうに、あちらを向いて初々しい姿で咲いている。先の【竹の子】の句と並べてみると、元気な男の子と恥ずかしがりの女の子の一对のイメージが立ち現れてくる。

⑫ この句は、千代の夕顔の句全十四句の中で、千代が最も好んで唯一多方面に出した句であり、千代にとって夏の夕の情緒を象徴する句であったといえる。活気ある夏の一日のざわめきは【夕かほ】の白い花の後ろに「隠れて」鎮まる。そのように見ると、【竹の子】・【姫ゆり】・【夕かほ】は、それぞれ夏の朝・昼・晩という時間の推移とも重なって見えてくる。

そして、夏の句の最後「唐崎の昼は・・」の句に、少し唐突な感じがするのは、この朝・昼・夕 という流れが、再び「昼」に引き戻されるためである。

⑬ 「唐崎」は、滋賀県大津市の琵琶湖南西岸にある景勝地で、古くは

「唐崎の一つ松」と呼ばれる松の木があったといわれ、芭蕉も次のように詠んでいる。

唐崎の松は花より臙にて 『野ざらし紀行』

千代は、二十三歳頃の伊勢への旅を始めとして、三十歳前後、五十九歳頃と、少なくとも三度の京方面への旅をしており、その当時まだその松の木があったかどうかは解らないが、道すがら目にしたのであろうこの辺りの景色は印象深かったと思われる。「唐崎」をはじめ、「瀬田」・「堅田」など、近江八景を題材にした句を詠んでいる。

ここで、時間の流れを戻してまで「唐崎」を入れたのは、「竹の子」・「姫ゆり」・「夕かほ」と、日常に近いもので綴った「夏」の景色の背景に、「唐崎」の名によって、遠い近江の地の老松を置きたかったからか。その「松」が、梢に「昼」の「涼しき「雫」をはらんでいる」としたのは、この「唐崎」が、「近江八景」では「唐崎の夜雨」として知られていることから、これをひとひねりして、ちょうど夕立の後のように詠みなしたものであろう。

いずれにしても、ここに「献上句」の中で一点、「唐崎」という日本の地名を入れたのは、歴史的景観や、和歌で言えば「歌枕」に当たる文学的伝統への含みを込めたものとも思われる。

四つの句は、そのまま相互の関連のない独立した句として読み進めても、それはそれで一つ一つが鮮やかな夏の景色であるが、千代は、たった四句の中に、いくつもの密かな仕掛けをして、独り楽しんでいようにも思われる。

・初秋 ⑭ 稲妻のすそをぬらすや水の上

⑮ 朝かほや起したものは花も見ず

⑭【稲妻】は、現代の感覚では夏のものであるが、旧暦では約ひと月余り後になり、秋の始めの頃になる。稲の結実の時期に多いところから、これによって稲が実るとされたという。この句は、千代が十七歳の頃、蕉門十哲の一人各務支考が初めて千代の家を訪れた時に詠んで支考を驚かせた、次の二句のうちの一つである。

行春の尾やそのままに杜若 見龍消息

いなすまの裾をぬらすや水の上 『句集』

空を引き裂く一瞬の閃光を、絵のように鮮やかな情景として捉えた句で、支考ならずとも十七歳の娘が目前でこれらの句を詠めば驚いたに違いない。稲妻の「妻」に着物の「棲」を掛け、その「裾」を「ぬらす」と二重に掛けるなど、技巧にも長けており、若さに任せての才気に富んだ詠みぶりであるが、その力量は歴然としており、千代自身にとっても、自らのスタートを記念する一句であった。千代の句作の生涯を振り返った時、この句は欠かせないものだったであろう。

⑮【朝顔】もまた、旧暦では秋の初めの風物である。ここに、千代の「朝顔」の句では最も知られている、次の句が採られていないことに注目しておきたい。

朝顔に釣瓶とられてもらひ水 『句集』

中本恕堂が、『加賀の千代真蹟集』―「遺墨と代表句」(参考文献に表記)で指摘しているように、若い頃に詠んでなぜか巷間に持て囃され、独り歩きをしてしまったこの句を、千代自らは好んでいかなかったことは

明らかで、四つの自撰句集(注二)にも全く採られていない。献上句においても別の朝顔の句を入れることで、密かに自身の意を主張しているかのようである。

この句で、「起こしたものは花も見ず」とは、今となっては意味が曖昧であるが、当時は読めば思い当たる機微があったのであろう。おそらく朝早い子供でもあつたらうか。いずれにしても、「起こしたものは花も見ずに姿を消してしまい、「起こされた」もの―千代自身か―が、初秋の朝清やかに咲く「朝顔」の花を目の当たりに見ているという句で、「花も見ず」という揶揄めいた表現に、花の美しさが強調されている。

また、これら「稲妻」「朝顔」の句には、千代が選句にあたって、当然のことながら、自らの俳生涯を振り返って俯瞰したであろうことが伺える。

注二 ①「自撰俳句帖」七十六句 ②「四季帖」四十四句 ③「四季帖」二卷「二十七句(中本恕堂『加賀の千代全集』収録)④「合作句画帖」(北潟屋大睡との合作) 十二句 の四集。いずれも稿本で、晩年の編集。

・仲秋 ⑮ 名月や眼に置ながら遠ありき (ありき＝歩き)

⑰ 月見にも陰ほしがるや女子たち

千代の「月」の句は、【三日月】から【後の月】まで七十八句あり、桜八十六句に次いで多い。中で【名月】の句は三十三句あるが、⑰は掲載文献数も突出しており、千代の会心の作といえる一句である。

⑱この句の特徴は、冒頭の【名月】という不動のイメージと、後半「眼



に置ながら遠ありき」の開放感に満ちた軽やかな情景の、対比の鮮やかさである。切字「や」が、かくまで確固たる断定の意味を持つに至るのも、後半の力みのない柔らかな印象が、遡って強調として作用するからである。

「遠歩き」とは、楽しい言葉である。どこまでと目的地を決めずに、月明かりの中、心の赴くままに、物思いにふけりつつ歩く。月とつかず離れずの感じが「眼に置ながら」によく出ているが、これは、「月を見ながら」ということではない。いつもそれがそこにあることを識りながら、ということである。

どこまで行こうと、月は千代の歩く世界をいつも照らしている。その疑いもない安らかさの中で「遠歩き」をするのは、他でもない千代自身である。

この句には通常の「楽しさ」を超えた、次元の異なる「平安」の気が感じられる。実景であっても無理がない句だが、むしろ内面の世界をこそ表現していると思われる。

「真如の月」という言葉がある。「真如」とは、仏教で説く「この世界の普遍的な真理」であり、名月が夜の闇を照らすことを、「真如の理が衆生の迷妄を破ることになぞらえて真如の月と言う」と辞書にはある。

この句の冒頭に戴く「名月」とは、まさに「真如の月」であろう。

千代は、名月の下を独り自由にそぞろ歩くような、満ち足りた、深い悦びの心を持っていることが、この句には表現されている。

千代の信心に関して確かに解っていることは、多くはない。浄土真宗に帰依して五十二歳の頃剃髪し在家のまま尼となったこと、五十九歳前後に親鸞の五百回忌法要に際して、地元加賀をはじめ越中、越前、遠くは京の東本願寺にまで参詣の旅に出ていることなどである。

また信仰に関わる句も、詞書などで明らかなものは十句程度であり、信仰的な香りの漂う句も多くは、自然の事象への静かな観照であり、千代の心の投影である。しかし、「月」に関わる句には次のようなものもあって、象徴的な「月」の句を、千代は繰り返して詠んでいることがわかる。

ながれても底しつかなり冬の月 補遺（補足三）  
こがらしやすぐに落付水の月 『句集』

これらの句には、⑩「名月」の句と共通する、ある確信が感じられる。そこには、物事の本質に対する動かぬ視点と、核となるものの存在が窺われ、更に「名月」の句には、そのような状況が千代に、深い悦びをもたらしていることが明らかである。

この句は千代の信仰句と見て間違いのないと思われるが、とすれば千代の信仰は、内的な深い会得と人間的な成熟を伴う、充実したものだだったことが読み取れる。

また、千代のこの句は、宝暦二年（1752）に刊行された、其麦編「七化集」には既に掲載されており、この頃千代は五十歳、剃髪の前とすることになる。五十二歳での剃髪は、この句からも、十分に機が熟したものだだったと見られ、次の剃髪吟にも自ずからなる余裕が窺える。

髪を結う手の隙空けて炬燵かな（尼になりし時）『句集』

この句に現れた象徴的な「月」は、その後二十余年を静かに底流して、安永四年（1775）、千代が七十三歳で逝去する時に、次の見事な辞世句として結実する。

月も見て我はこの世をかしく哉（辞世） 塚

また、この句はこの献上句の中で、⑧について二つ目の、千代自身を表現した句である。

⑰ 「月見にも陰ほしがるや女子たち」

先の句で、平明な中にも自身の深い心境を表現し、内に向いて密度の濃くなった句の流れを、この句は同じ「月」を題材として、やわらかく元に戻す役割をしている。若い女性たちは、月見に來ても、物陰でうわさをしたり笑いあったりと賑やかだ。「女子たち」の普段の姿をユーモラスに描くことによって、視点を外に転じ、句の流れに元の日常の活気を取り戻している。

⑯・⑰は、「月見」における個と集・一対であり、明快なリズムの転換がここにある。これは、⑧・⑨が「花見」においてやはり個と集一対となり、流れを転換したと同じ手法である。

・晩秋 ⑱ 初雁や山へくばれば野にたらず

⑲ 百生やつるひと筋の心より (三界唯心)

⑳ 朝々の露にもはげず菊の花

さて、秋は深まり、「晩秋」の景の初めは【初雁】である。

⑱ 初雁や山へくばれば野にたらず

千代にはこのような、画面配置を楽しむという詠みぶりの句に印象的なものがある。

七草や三つ四つ二つ置所 草稿

たから船よい間所にかかゝりけり (床にかかりたる宝船の画賛)

『松の声』

千代には折々に絵画的発想の句が見受けられ、また書における連綿、散らし書きの巧みさなど、敏感なバランス感覚は千代の持ち味の一つである。

初雁の季節、心待ちにしていた雁の姿を山に見て、逸る気持ちをわざと「野にたらず」と不足の心で表現してみせることで、山から野へ、視界は一気に広がる。遊び心に、そのような効果をも盛り込んだ句である。千代の句に多く見られるこのような遊戯性は、当時は句の余裕・俳味として好ましく受け取られたと見られるが、時代が下るに従って、技巧的、という否定的評価を受けることが多くなる。

⑲ 百生やつるひと筋の心より (三界唯心)

「百生り」は、一つの茎や蔓などに多くの実がなることであるが、この句では、たぐさんの実が生った瓢箪である。

大川寥々の『千代尼伝』には、千代四十一歳の「癸亥歳旦」が初出とあるが、もっと若い時期の作という説もある。越前の永平寺で「三界唯心の心を」と請われて詠んだ句とされ、多くの集に載った句で、「朝顔や釣瓶とられて・」の句を千代自身は好まなかったのとは対称的に、真蹟も多数残っており、自他共に認める千代の代表句といえる。

冒頭の「百」という数を、「つるひと筋」の「一」ですっきりと括り、そのありありとしたイメージを、「三界唯心」―すべてのことは自分の心のありようから、という要諦に確かに繋いでいる。情景と句意とが瞬時

に一体となる鮮やかさは見事でありながら、沢山の実を生らせた瓢箪、というごく日常的な情景がユーモラスでもあり、やわらかい句の姿を呈している。千代自身も心安く挙げられる会心の作として、献上句の選の中では当初から挙げられていた一句と思われる。

⑳ 朝への露にもはげず菊の花

現代から見れば古めかしく感じる句である。次の句も、ほぼ同じ情景である。

露の恩白ふはじめて菊の花 『松の声』

菊の花の冴え冴えとした美しさを、献上句では「朝への露にもはげず―負けず―とし、引用句では反対に「露の恩―露に洗われたお陰で―としている。

千代の「菊」の句二十四句のうち色のわかるもの（五句）はすべて「白菊」であることから、この菊も白菊であろうと想像される。

白菊や紅さいた手のおそろしき 『句集』

しら菊や日に咲ふとはおもはれず 『句集』

白菊は何ともなしにすぐれけり 『松の声』

朝々目に触れる千代の身近に「白菊」があったことは確かであろう。口紅をさした手指の赤を、白菊と較べて「おそろし」と感じたり、「日に咲ふとはおもはれず―日中の喧騒にはそぐわない―としたり、直截に「すぐれたり」と言ったりしている。端正な白菊の花には、確かに汚れのない清らかな感じがあるが、千代が、繰り返し白菊を讃えるのは、その白さに、格別の思いを持つからである。

蓮白しもとより水は澄まねども 『四季帖』

同じ白い花でも、この句は、より明確にその白さの意味を表現している。

濁った水の中に咲く白い蓮の花といえば、これは明らかに仏教的な徳性を含んでいると言える。

信仰に関わる千代の句には、直截な表現の、次のようなものがある。

手折らるる人に薫るや梅花の花（仇を恩にて報ずるといふ事を）

『句集』

清水には裏も表もなかりけり（真如平等） 『句集』

これらの句は、「菊の花」の句も含めて、技巧的なところはなく、詠みぶりは端直で、概して平凡とも言える地味なもので、信仰の句として一括りにされることが多く、これまで殊更に取り上げられることはなかったように思う。

しかし、句数に制限のある献上句でもこの句を外さなかったのは、千代にとってこの句が、実は重要な意味を持つものであるからに他ならない。

千代には「献上句」の他に四つの自撰句集があることは先に述べたが、「献上句」二十一句の内、約半数の十一句がこれらの句集のいずれかと重複しており、中でもこの「菊の花」の句は、四つのうち三つの自撰句集に採られていて、「献上句」を含む千代の自撰集の中で、最多の頻度で採られている句ということになる。

才気に任せて自在に句を楽しむ印象のある千代であるが、信仰に繋が

るような内に向かう視点は、実はこのような地味な一群の句に現れている。菊花や蓮の白さに敏感に感応し、どこか生真面目さが漂うこれらの句が、千代の内的な真実に近いということが、これらの関連から浮かび上がってくる。

尚この句は献上句の中で、「初桜」「名月」に次いで三つめの千代自身を語る句である。

・冬の句 ⑭降さしてまた幾所か初しぐれ

降ってきたと思えば止み、陽がさしたと思えば照りながらまたさらさらと降ってくる、冬の始めの北陸特有の情景で、献上句は終わる。

菊の句で大きく千代自身に振れた句の流れは、ここでは季節の推移によつて自ずから日常に戻されている。これまでのように、千代と若い女性たち、という対比ではなく、千代自身も含めた人の世の熱気からすつと遠ざかるような、ある意味で実体のない【時雨】であることが、ちょうどそれまでの鮮やかな景色に、薄い布を引いて幕を閉じたようにも思われて面白い。

千代の献上句に真の意味での冬の句はない。

形の上では、四季を完結しながら、実質的には献上句は、秋の終わりで切っている。

千代の冬の句には、寒さの中で独り自己を見つめた、次のような一群の句がある

雪の夜やひとり釣瓶の落る音 『はしの松』

独り寝のさめて霜夜をさととりけり 真蹟

しかし、千代はこれらの、自身の胸奥を詠んだ句には触れず、献上句を、公にするものにふさわしい、ある明るさと端正さのうちにさりげな

く閉じた。

これは、冒頭「新年」の三句を篤くしたことに對する対局の引き方として、千代のバランス感覚が表れたものと言える。

「献上句」に表れた千代の句の本質 — 「名月」の句

見てきたように、「献上句」は単に二十一句の「控え」・「覚え書き」ではなく、明らかな意図をもって編集された作品世界である。

中で、句柄のひとときわ大きく、凝縮された千代の内面を表現するのが

⑮「名月や眼に置ながら遠ありき」

であろう。「名月」とは仏教的真理の象徴であり、千代の信仰的確信の象徴であることは先に触れたが、千代はそれを「目に置ながら」つまり生きる標として、「遠歩き」するように楽しげに生きる、と表現している。

明るい名月の下どこまでも自由に歩く、この構図は、そのまま千代の世界観であろう。

「献上句」において、「名月」の句と並んで千代自身を表現する二つの句を見たが、そこにあるのも同じ「名月」に繋がる信仰的視点と言える。

⑧「初桜」をいそいそと見に行く時、⑩白菊の香りに襟をただす時、そして、⑪蔓ひとすじに数多の実を結ぶ瓢箪にも、千代は同じ本質を見ている。千代の句の世界は、極言すればこの「名月」の下に広がる世界であり、それぞれが、「遠ありき」の具体的な情景であるとも言える。

「献上句」は、「千代尼素園」という剃髪後の号をもって閉じられているが、この「尼」という文字には、十分な根拠があると言えよう。

また、この句は前述したように辞世句「月も見て我はこの世をかしく

哉」の「月」と密接に関連していることは疑いなく、内なる「月」は、遅くとも五十歳頃から七十三歳の逝去まで、晩年の千代の内にあつて、多くの句の底を流れていることは確かである。

近世中期の当時、内に仏教的信心をもつて晩年を迎えることは、殊に、浄土真宗の盛んであつた北陸にあつては決して希ではなく、むしろ一つの望ましい在り方とするような宗教的土壌があつたものと考えられる。『千代尼句集』序文・跋文、或いは書簡等においても、千代の周囲の人々が千代を「尼」と呼んで敬慕し、その句の風韻を信心の表れと受け取っていたことが知られる。

しかし、時代が下るに従い社会が暗黙裡に共有していたこのような精神風土は薄くなって、徐々に消失する。「千代尼」とは単なる呼称となり、千代の句の鑑賞・解釈からも、かかる時代背景に対する理解と配慮が抜け落ちて、単に表面の平易さ明るさしか見えなくなり、安易に俗なもの、気ままな遊びの句ととらえる方向に傾いてしまっている。

千代の、少なくとも晩年の句境は仏教的世界観を基盤に持つことを、時代背景からも、「名月」の句を中心とした「献上句」の世界からも再確認し、ここから千代の句の解釈・評価を見直す時、見えてくるものは大きい。

ただ、千代の「名月」の句に表れているように自在な心境に至ることは、いつの時代でも希なことと言えるであろう。

### 「献上句」に表れなかった句群

さて、「献上句」は当然ながら千代の句のすべての側面を投影しているわけではなく、ここには現れていない千代の句の世界がある。

「献上句」の世界には、ある公の場に臨んでの礼儀正しき、ともいふべき雰囲気があり、また、その選句の立ち位置には、あまり直接的な感情を表現した句は避ける、といったような、一種の「慎み」の気配が感じられる。

これは、千代の立場としてはごく自然な心の動きであるに違ひなく、良し悪しということではないが、結果としてここには現れなかった句群がある。

時代や成り立ちからしても、「献上句」が一般の「私家集」とは明らかに一線を画すものであることは当然である。

ここで、「献上句」にはない千代の別の側面を表す句を幾つか見て、稿を閉じることとする。

蝶々や何を夢みて羽つかひ 『句集』

吹別れ／＼ても千鳥かな 消息

どちらも晩年の作である。蝶の羽づかひはそのまま千代の息づかひに重なり、千鳥は寒風に吹かれても吹かれても小さな翼で羽ばたいて元に戻ってくる。自然の中のか弱い、しかし確かな生命力に共鳴してゆく視点が千代にはある。

梅咲や何が降ても春ははる 『句集』

うそか見よ水のもゑたる春の日の（水のもえたる＝陽炎） 真蹟

紅粉さいた口もわすれて清水かな（さいた＝さした）『芋かしら』

梅が咲き陽炎がもえる春に子供のようには歓喜し、湧き水の美味さに我を忘れる千代は、自らの澁刺とした感性を、そのままに表現する度量を

も持つ。このような句に出会う時、その感動は時代も状況も超えることに気がつく。

蝶ほどの笠になるまでしたひけり 餞別 『松の声』 (注三)  
子供らに山拝ませて氷室餅 草稿

旅に出る人を見送る千代の情の濃やかさは、格別なものがある。また、子のない千代が、氷室餅を食べる子供らに寄せる、親に劣らない深みのある心情にも、心を打つものがある。

これらの句の、開放感に満ちた柔らかな感性と自由な表現は、古びることなく、軽々と時代を超え、読む者の心に響いてくる。

千代の句の世界は、「献上句」に現れた世界観に立ち、ここを土台としながらも、「献上句」を超えて、大きく広がっている。

注三・・・笠になるまで は・・・笠に見るまで という文献もある。

### 主な参考文献

- ・『加賀の千代全集』 中本恕堂 昭和三十 北国出版
- ・『加賀の千代真跡集』 中本恕堂 昭和四十一 北国出版
- ・『加賀の千代研究』 中本恕堂 昭和四十七 北国出版
- ・『千代尼伝』 大川寥々 昭和四十九
- ・『朝鮮通信使と千代女の研究』孫順玉 平成十八 千代女の里俳句館
- ・『千代女生誕三百年祭記念 特別展「千代女の生涯」「千代女の芸術・心」』

松任市立博物館 平成十五

### 補足

- 一 「献上句」・引用句等の読みについては、中本恕堂『加賀の千代全集』によった。また、写真資料に照らして明らかな次の誤りについては、稿者が正した。訂正箇所 ①：塵さへ今朝のうつくしき ↓ うつくしさ

- 二 引用句については、文献が重複するものは編集時期の明らかな『千代尼句集』(『句集』と略記)、『俳諧松の声』(『松の声』と略記)を優先して表示し、これ以外のものについては代表的な文献名を表示した。

- 三 この「補遺」は、参考文献に挙げた中本恕堂『加賀の千代全集』に掲載されている「補遺」である。